

印度河上
流の谷地セシル嶺
頂一萬七
千八百尺氷河の流
動

ればなり。沿道南下後の兩岸は黑色片麻岩の絶壁を成し、谷中には硅石多し。又印度河の谷地は赤緑泥岩、花崗石、硅岩より成り、嶺の附近花崗岩の大部に石英を混す。此地にて印度の「キヤラバン」に會す。其一行駄馬三十餘頭、人十五六名、葉爾羌に向ふ者なり。着後幕營地の西側高處より嶺を撮影す。

一五 嶺上氷河の險、池畔氷層の美

五日氣温午前二十一度、午後四十九度、午前七時五十分發、十時二十五分セシル嶺の頂上に達す。該嶺は海拔實に一萬七千八百尺、氣温は此に於て十九度を示すに至るも、幸に風少く、午後零時三十分、全く超過し畢りし後、南風俄に強く起れり。眞に幸運なりしと謂はざるべからず。

氷河は即ち嶺上に在りて、其の河と稱するは稍々不適當なるに似たるも、試に穴を穿ち棒を樹て、或は何等かの手段に因りて目標を附し、目を経て之を檢むれば、其目標は必ず位置を異にし在りと。即ち肉眼に其流動の狀を認め得ざるも、實は絶へず流動しつゝありと云ふ。果して然らば氷河の名も復た訝るに足らざるなり。若し夫れ氷上平滑にして、恰も鏡面の如くならんには、争か能く徒涉し得べけん。